

第2分科会「モルモットとの生活を通して」

山田美由紀

1 はじめに

昨年度4歳児ばんだぐみ、今年度5歳児ふじぐみの担任として、クラスや学年の飼育活動を通した様々な出来事や子ども達の姿から、幼稚園における飼育体験の意義を考えてみたいと思う。

2 うさぎとの出会い

2008年3月4日、3歳児年少組に一匹のうさぎが仲間入りした。名前はここあちゃん。4月、子ども達は年中組に進級し、各クラスの前にはケージに入ったうさぎが置かれ、進級当初、心の拠り所とする子もいた。登園すると、保育者が用意しておいたキャベツやクローバーをあげる事で心が和む子も。慣れてくると、それまではえさ入れに入れたペレットをそのままケージに入れるだけだったのが、1粒ずつ自分の手から食べさせる子が出てきた。うさぎの口の前に手を出すと噛まれるのでは、との保育者の心配をよそに子ども達はそのやり方をしたりどんどん上手にあげられる子が増えていった。1学期後半、うさぎへの関心が高まり、“これは誰のうさぎかなあ？”とつぶやく子。そこでクラスの話題に挙げると、“飼いたい！！”と子ども達。クラスでの飼育が始まり、昼間は保育室前の廊下にケージを置き、いつでも子ども達の目に触れ、身近に接す事が出来るようにした。最初のうち、子ども達は、これまで通りやりたいうさがえさやり・水替えなどをし、掃除は保育者が子ども達の見ている前でやってみせるようにした。次第に排泄物の溜まるトイレを洗いたがる子も出てきたが、この時期はまだ“臭い・汚い”と言って掃除は、やりたがらない子の方が多かった。

3 虫たちとの関わり

うさぎとの触れ合いと平行し、進級当初から子ども達を夢中にさせたのが、アリやダンゴムシなどの虫たちであった。特に保育者が教えた訳ではないが、子ども達はどのような訳か虫たちの居場所を良く知っていて、そんな所に？という所から見つけてくる。何匹も何匹も、とにかくつかまえることが嬉しいのだが、つまえてもそのまま虫かごに入れておくだけなので、すぐに死んでしまい、またつかまえては死ぬ、の繰



り返しであった。紙芝居や図鑑などを保育者が一緒に見て飼う環境を整えようとするが、子ども達の一番の関心は、まだつかまえることにあった。

2学期に入り10月10日、園庭で虫探しをしていてオオカマキリを発見した男の子達。クラスで飼いたいとの熱い思いから飼育がスタートした。「カマキリは生きたエサしか食べないんだよ」という1人の言葉から、今までその事実を知らなかった子たちも一緒になってカマキリのためのえさ探し（虫探し）が、男の子を中心に始まり、それが毎朝の日課となっていく。1学期同様、図鑑で飼育方法などを見る姿があり、この時は1学期よりも飼育することに意識が向くようになっていた。「固い殻の虫は食べないんだって」・「もっと葉っぱを入れないと駄目だ」などと、図鑑を参考にするようになった。ある日、つかまえたえさをカマキリが捕食する姿を目の当たりにした子ども達が、その光景に衝撃を受け、家に帰ってからその出来事を母親に話すなど、その子なりに“生きる事”・“生命”という事を考えるきっかけとなったようだった。この出来事の後から以前よりも“えさ探さなくちゃ！！”・“お腹空いて死んじゃう”という気持ちが増して、お世話を進んでする子が増えた。10月20日頃・11月4日と、2度にわたってオオカマキリが産卵しているのを登園後発見。11月14日には、隣の年長組でコカマキリが昼食中に産卵を始めたとの連絡が伝わり、自分達のクラスのカマキリが産卵する瞬間を見られなかった子ども達は、食べるのをやめて、

すぐさま産卵するカマキリを見に走った。この事から、赤ちゃんカマキリが卵からかえるのを楽しみにする気持ちが強くなり、この頃にはクラス全体の関心事となっていた。

4 うさぎとの触れ合い・仲間とのつながり

同じく2学期、うさぎへの関心も高まってきていて、他の当番活動と同様、うさぎの掃除も“○○ちゃんばっかり”にならない為に、クラスで話し合った結果、当番として行う事になった。掃除中にう



さぎがケージから飛び出して逃げるのがしばしば起こり、その度に大騒ぎになっていたが、10月下旬頃より、子ども達の中に、逃げたうさぎをつかまえられる子が出てきた。それが自信となり、自分から色々な友達と関わったり、うさぎが逃げたら自分の出番だ、といった具合に進んで行動できるようになった子も、11月子ども達に捕まえられるのに慣れたうさぎ、これまで抱っこされるのを嫌がっていたのが、子ども達の抱っこに大人しく身を任せるようになった。この事がきっかけとなり、自分も抱っこしてみたいという子が増えたので、段ボールで囲いを作り、ふれあいコーナーにする事を子ども達に投げかけた。これまで、好きだったけど抱っこできなかった子、触れなかった子も、友達にやり方を教わったり、抱っこは無理だけど水やりなら出来るなど、うさぎとの新たな関わり方が、新たな友達との関わりの中から出てくるようになった。この事から新しい友達関係が広がり、カマキリと同様、クラス全体の興味・関心事となっていた。そして、触ったり抱っこしたりした事によって知った温もり・毛の奥にかくれた皮膚の色・爪や足・自分よりも小さくて弱い生き物であることなど。この事からうさぎへの愛着が更に増し、12月に入ると子ども達

は自分達だけで世話をしたり、ケージから出すとまるで赤ちゃんをあやすかの様に左右に揺すっている姿も見られるようになった。

3学期、3月、卒園を間近に控えた年長組から、生活面での様々な引き継ぎがされた。その中には、モルモットの飼育もあり、掃除の仕方やえさのあげ方・床材(木くず)の敷く量など、1つひとつ丁寧に、やり方を見せてもらいながら教わった。最初、年長組になったら「うさぎも一緒に年長に連れていく」と言っていた子ども達だが、「今度、年中になる人達のうさぎがいなくなっちゃうじゃん」という子の声から、皆が納得し、うさぎは次の年中組に引き継ぐことになった。

5 年長・モルモットとの生活

クラス替えをし、進級を迎えた子ども達、当



初から各クラスに1匹ずつのモルモットが衣装ケースで飼育され、3月に引き継ぎされたことやうさぎと触れ合ってきた経験から、関心が高かった。当初から触れ合ったり、引き継ぎで教わった事を思い出しながら世話をしたがる子が多く、うさぎの経験が活きていると感じられた。うさぎよりも小さく、動きも穏やかなので扱いやすいこともあり、モルモットに触れられるようになった子がうさぎの時よりも早く、その姿を見ていると、人形を扱うようなやり方であったり、時には乱暴に思えるような扱い方に見えることもあったが、本人達は悪気なしで、大切にかわいがっている気持ちでいるようだった。当初から座って抱っこをする約束をしていて、子ども達はその約束を守っていたが…。4月下旬、昼食後にケースの掃除をしていてモルモットを移動させる際に、どちらが持つかと2人の子が持とうとした時に30～40cmの高さから落としてしまう出来事が起こった。替えたばかりの



床材にうっすら色の付いた尿が出ていて子ども達も保育者も、“あれっ、何か色が付いてるよ”と、落とした時の衝撃で異変が起きてしまったのではとの心配から、職員室で様子を見てもらうことにした。職員室に運んでいる途中、うっすらとした色の付いた尿が、みるみるうちにはっきりとした赤い血となって、床材のあちこちに痕を残し始めたので、そのまま動物病院へ連れて行くこととなった。診断の結果、体の中のどこかが切れたのだらうとの事。ゴールデンウィーク明けまでのしばらくの間は静かな所ということで職員室に置く事となった。子ども達に翌日診断の結果を伝え、心配そうな様子を見せていたが、午後の世話を当番やそれ以外の子たちが張り切って行う他は、自由遊びの時間にはほとんど話題に挙げたり、様子を見に行ったりといった姿は見られず、保育者からしてみると、今までの子ども達の姿からするとちょっと心配して様子を聞いてきたり事務所に見に行ったりするものと思っていただけに、子ども達の姿に首を傾げるばかりであった。

ゴールデンウィーク後、モルモットの状態も戻り久しぶりにクラスに帰ってきたが、今回の事で慎重になってしまったのか、それとも興味・関心が薄らいでしまったのか、以前のように自由遊び中に自分からモルモットに触れようとする姿が見られなくなり、これがしばらく続いた。

5月下旬、モルモットの関わりに積極的な隣のクラスの子が、2クラスのモルモットと一緒に遊べるようにしようとした事から2クラスのモルモットの交流が始まった。すると、隣のクラスの子が行っている姿を見て、長い牧草を食べやすいように短く切る・水のボトルの中にビタミンCを入れるなど、新たな発見を真似する

ようになった。

6 獣医師の話

6月1日、園の獣医師、渡辺守都（もりと）先生に来て頂き、子ども達にモルモットの生態や飼育方法をお話して頂いた。事前に、子ども達が疑問に感じていたこと、どうすれば良いかわからないこと等をクラス毎で挙げておき、質問に答えて頂く時間も設けた。4月下旬におしりから出血してしまった出来事についても子ども達の方から手が挙がり、そうならないためにはどうしたらいいかについて他、様々な守都先生の話に、子ども達は真剣に耳を傾けていた。

その後、モルモットとの触れ合いの中で、子ども達は守都先生の言葉を思い出しながら抱っこしたり世話をするようになった。

7 週末飼育始まる

住環境などの事情で動物の飼育が家庭で出来ないケースが増えている。週末だけでも家庭での飼育を家族と楽しみながら経験して欲しいとの思いから、希望者の週末飼育をスタートさせた。家庭での様子を知らせて頂けるよう、ノートを用意し、無理のない程度に保護者の方に家庭での様子を知らせて頂くようにしたところ、モルモットがいることで家族の会話が aumente た。モルモットを園に返す時に子どもが寂しがって泣いたなど、様々な姿が印され、モルモットの与える影響の大きさが感じられた。

8 モルモットへの思い

☆前年度の年長組から引き継いだモルモットの3匹中2匹が、4才を越え老齢となったことから、子ども達が思う存分触れ合えなかったり、モルモットに負担がかかり過ぎないだろうかとの保育者の思いから、4月に入ってから、まだ手のひらに乗ってしまう程の小さなモルモットを2匹購入し、職員室で世話をしていた。隣のクラスの子も達がいち早くその事に気が付き、世話をしに行くようになった事がきっかけで、元からいる1匹に加え、その2匹も隣のクラスが飼うこととなった。7月6日隣のクラスにいる小さなモルモットを1匹、譲り受ける事となった。

●それまでの姿●

5月中旬から、隣のクラスが合計3匹のモルモットを飼い始めていて、それに気付いていた子ども達だが、隣のクラスへ行ってモルモットと触れ合うことはあっても、特に“自分達も！！”といった言葉は出ず。しかし、日々の子どもの姿や週末飼育での家庭での様子から、モル

モットに対する愛着が感じられたので、クラス全体で集まった時に小さいモルモットを話題に挙げて見ると、子ども達の中から「隣（のクラス）だけ良いな—と思ってたんだ。」・「隣（のクラス）はお世話が上手だから園長先生が、お願いしますって言うてくれたんだって！！」の声。それを聞いていた子たちの中から「うちらだって、お世話上手だって言うてたもん」と反論の声。その会話が交わされた事から、保育者が「みんなも飼いたい？」と聞くと、「飼いたい！！」という多数の声が挙がった。そう思っていたが今まで口にせず心に秘めていたのかと改めて気付かされた。一方、少数ではあるが「飼わなくて良い」・「2匹だと大変！！」の声もあった。この意見を口にした2人は、普段モルモットと触れ合ったり、気に掛けたりしている子達ただけに、保育者としては正直ショックだったが、その理由を聞いてみると、「今まで2匹一緒にいたのに離れ離れになるのはかわいそう」とのこと。本当の気持ちとしては“もちろんクラスで飼いたい”だったので、隣の部屋だからいつでも会わせてあげられると話すと、安心して「じゃ、飼いたい」ということになった。“2匹の世話は大変”と言った子は、普段の姿を思い浮かべて見ると良く触れ合っているが、糞や尿に対しての抵抗が残る子で、モルモット自体は大好きな子だった。皆の意見がまとまり、いざ隣のクラスに頼みに行くと、すんなりOKが出て、2匹になると1匹だったときよりも、子ども達がモルモットと触れ合う機会が増えた。中には絵を描いて家から持ってくる子も。振り返ると、子ども達が見せていた姿に疑問を感じる場面もあったが、思いはしっかり持っていながらも言動に移せずになだけである事がわかった。またこれまで、年中の時のうさぎから、年長になってからのモルモットまで一度も触れようとしなかったが、2学期に入り、ケースの掃除に自ら参加し、モルモットを移動させる事が出来るようになった子もいた。この姿から、これまで過ごしてきた環境の中でそれぞれの子の動物との関わり体験の違いにより見せる姿は様々だが、その子なりに自分のやり方とペースで動物への愛着を増し、近づ

こうとしていることを実感した。

9 うさぎの死・モルモットの死

前年度、子ども達の生活の中で大きな存在となったうさぎのここあちゃんが、6月17日、脊髄損傷のために死んだ。前日の夜、雷に驚いたのが原因ではないかと思われる。そして1ヶ月も経たない7月15日、隣のクラスの、前年度から引き継いできたモルモットが老衰のために死んだ。この相次ぐ動物達の死を目の前にした子ども達、これまで愛情を込めて世話をしたり関わったりしてきただけに“冷たい”・“耳の色が違う”と、生前とのあまりにも違いすぎる姿に大きなショックを受けた子は少なくなかった。涙する子も1人2人ではなかった。この年齢の子ども達に死をどこまで理解することが出来るか難しいところだが、生命ということ・生きるといふことの大切さはその子なりに感じていると思われる。そして、今は分からなくても、心の中に残してくれた動物達からのかけがえのないものが、これからの子供達にとっての大きな宝物となっているはずある。

10 動物飼育の必要性

動物飼育によって何が育つか？毎年子ども達と動物が触れ合う中で必ず考えることである。その姿から、自分より小さく弱い相手に優しい気持ちを持つようになるという事が見えてくる。その他、自分とは違う、動物にとっての心地良さがあることにも気付くようになるが、それは動物が、自分のしたことに対して行動により思いを返してくれるからで、その事によって、動物への愛着も増していくのだと思われる。そして、自分がいないと駄目・自分が世話をしなくては、と責任感が育ち、自分の存在価値を知っていくのだと思おう。まずは大人が生き物に対してどう思い、関わるか。それが子ども達の意識の基本となることから、まずは保育者自身が自分を見つめ直すところから始めるべきであると感じる。

(裕学園谷戸幼稚園教諭)

